

デジタルアーカイブの利活用のハイブリッド化（２）

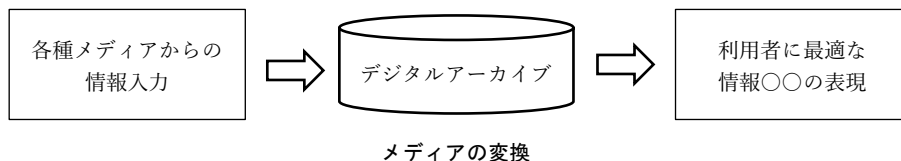
～利用目的に適したメディアを選び、組み合わせ活用～

後藤 忠彦（岐阜女子大学）

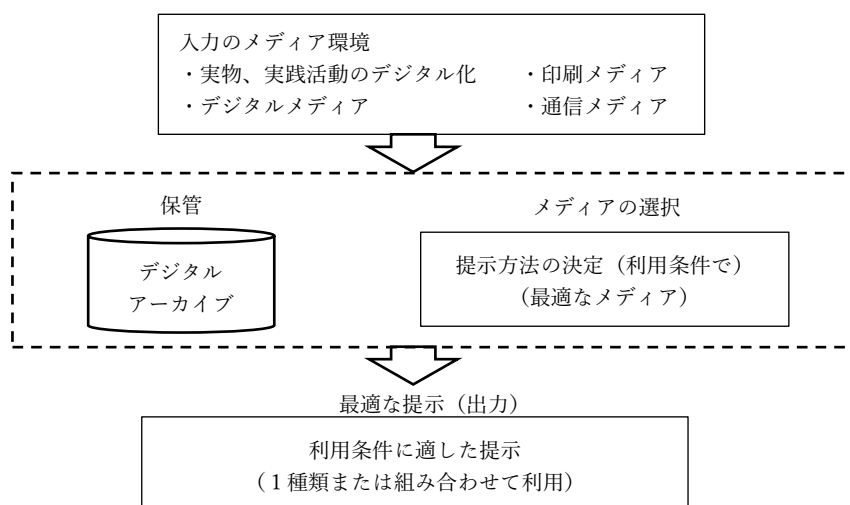
デジタルアーカイブの利活用の提示・提供でのハイブリッド化については、後藤忠彦（2012）『デジタル・アーカイブの新しい研究の展開』（岐阜女子大学）に報告している。当時は、以下のように Hybrid Media として説明していた。

1. 初期のハイブリッド化について

デジタルアーカイブの中には、入力のメディアに関係なく出力をして利用者の目的に適したメディアで表示される。たとえば、印刷物を入力したデータが電子書籍やプロジェクターで提供され、入力と出力の関係は一定でなく、その利用条件に応じて適したメディアを用いる。



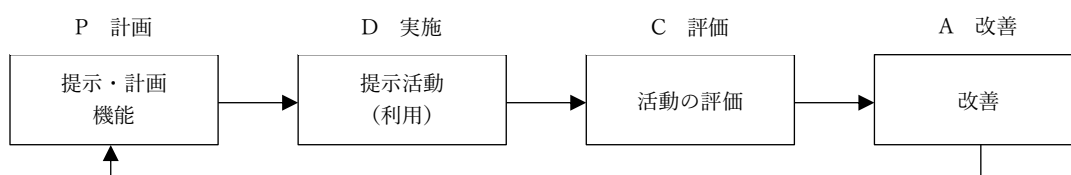
このデジタルアーカイブの中でのデータの相互の変換、移行は利用者、または、提示環境に適した状態での情報提供を可能にする。この提示方法の決定には、利用目的に応じて、どのような提示方法を使うかの調査や利用結果の適否の評価の改善が必要となる。



このような多様な提示の方法の中から適する提示を選び、組み合わせ利用がされる。

2. デジタルアーカイブの提示の評価…フィードバック（還元情報）

このような提示・評価が利用目的に適したメディアを選び組み合わせ活用が進みだした。この提示に対し、活用結果を評価し、その改善についての研究が進められた。

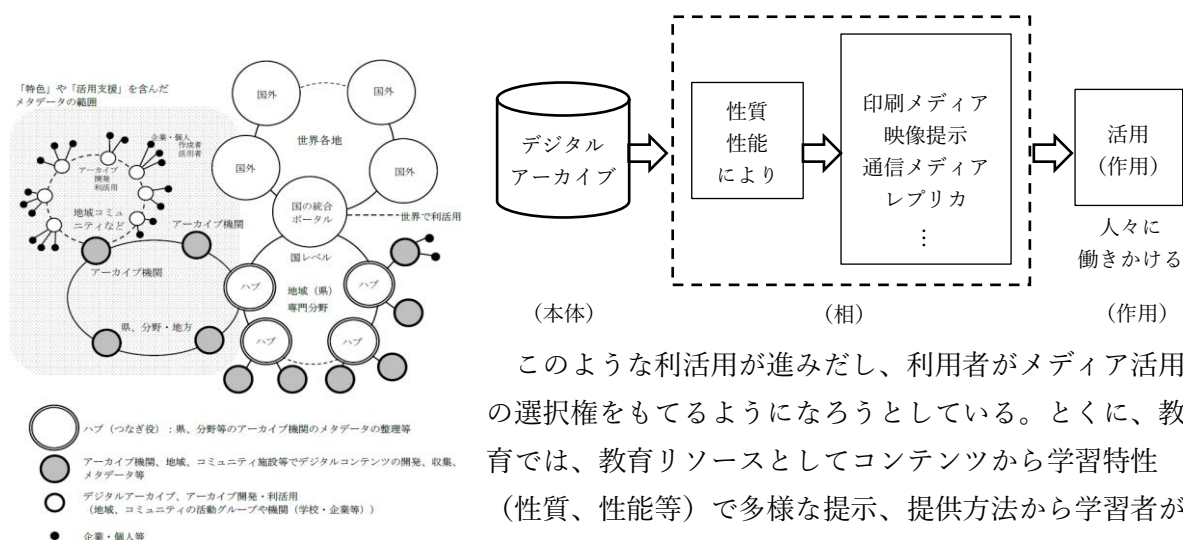


たとえば、提示に対し、行動分析、イメージ調査、評価、提示による知識、理解、技能および適応力などの習得状況や自信度の評価・ポートフォリオ手法を用いた評価、さらに、提示の方法の適否についての利用者の受け止め方などのデジタルアーカイブの利活用の評価に関する研究が課題になった。このような評価のPDCAサイクルによるデジタルアーカイブの利活用についての評価処理がなされ、利活用の結果のフィードバック（還元情報）が進みだした。

尚、当時、齋藤陽子氏が教育でハイブリッド化の表現を使うことに対し、後藤がかつてコンピュータを学校教育で活用したとき、多くの教員、マスコミ等の方々から教育工場と批判された経験から、同様の批判がされないように少し待たれたらと言った。しかし、2021年現在では、新型コロナウイルスの流行で、当時批判した方々もテレビ会議システムやe-learningを利用して。デジタル化と小さなウイルスにより教育方法も大きく変化し批判される心配もなくなった。

3. デジタルアーカイブの利活用のハイブリッド化

デジタルアーカイブの共有・保管・流通が進みだし、利活用に使うデジタルコンテンツも2010年頃までの収集、デジタル記録、選定、保管から始めるのではなく、各機関、地域コミュニティ、ハブ、統合ポータル等から選び活用が進みだした。また、検討されたデジタルコンテンツ（1、0）データ本体は、その性質、性能で各種の表示方法ができ、その中から適するものを選択し組み合わせ活用する。



デジタルアーカイブの各機関の関係

このような利活用が進みだし、利用者がメディア活用の選択権をもてるようになってきている。とくに、教育では、教育リソースとしてコンテンツから学習特性（性質、性能等）で多様な提示、提供方法から学習者が学習状況、学習環境等で適するメディア（提示・提供）の方法を選び活用する時代になってきている。